

はつらつと、いきいきと、あなたの心へ。

# みどりの周波数

# RKK

みどりは、コミュニケーション色。

みどりは、うるおい。  
人間にリフレッシュな酸素を運んでくれる自然の恵み。  
いつも若々しく、眩しく輝いています。  
RKKは、新鮮でうるおいのある  
総合情報ステーションをめざしていきます。  
赤は、情熱、ホットスピリット。  
RKKは、時代の動きにすばやく対応し、  
リアルでビビッドな話題を提供します。

みどりの周波数

# RKK

熊本放送

熊本市山崎町30  
TEL 328-5511(案内台)

ベートーヴェン

# 第九

昭和59年12月27日(木) 午後6時30分  
熊本県立劇場コンサートホール  
主催：熊本県・県民第九の会・県文化協会

Beethoven



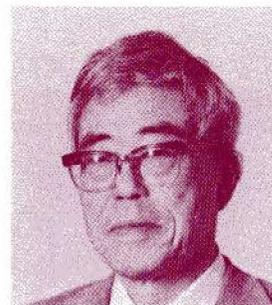
熊本県知事  
細川護熙

時の流れは速いもので、今年も、第九の季節がやってまいりました。

熊本県立劇場完成を機に発足した「県民第九の会」が、歳末の文化イベントとしてベートーヴェン第九のコンサートを開催されるようになって今回で3回目となったわけです。

本県は、古くから文化の栄えたところではありますが、近年の所得水準の向上や、余暇時間の増大に伴い、県民の文化の関心は、従来のように単に文化を受け入れるだけではなく積極的に自ら文化活動に参加し、新しい文化を創りだす方向へと変化をしております。私といたしましても、その積極的取組みの中で、熊本生まれの音楽、熊本発のファッションを次々に送り出すことのできるような豊かな文化の源になることを願っているところであります。その意味で「第九」のコンサートは、いわば熊本の音楽界の素晴らしいエネルギーの結晶でありまして、その与える影響は、計り知れないものがございます。

今年一年、すばらしい盛り上がりを見せた熊本の芸術文化活動をふりかえり、来年、そして21世紀に夢をかけて、「歓喜」の大合唱を響かせていただきたいと思います。



熊本県文化協会会長  
岩下雄二

ベートーヴェンの「第九」は、特に音楽愛好者というだけでなく、戦後の学校の音楽教育を受けた若い国民層にはすでに親しいものになっている。それをナマの声、ナマの音で聴くことができるのは、それらの人たちにとっては大きな喜びである。

熊本の「県民第九の会」はその贈り物をすでに2年も続けており、今年もまたそれを与えて呉れる。それは贈るものにとっても、贈られるものにとっても大きな喜びである。

「第九」はベートーヴェンが「人類の歓喜の歌」として作曲した、彼の最後の大交響曲である。

必ずしも喜ばしい響きや調べだけが満ちている地球ではない。楽聖が創造した喜びの調べを聞き、その感動の中に浸り得ることは、それこそ大きな喜だと云うべきだろう。

「県民第九の会」と「県立劇場」が、それを県民のために贈って呉れることに、深い感謝を捧げるものである。



県民第九の会実行委員長  
有馬俊一

歳末ご多忙な折、よくおいで下さいました。おかげ様で第九演奏会も第3回を迎え、熊本の音楽ファンに贈る恒例の行事として定着して参りました。

今回は指揮に山岡重信氏、独唱者に中沢桂、木村宏子、板橋勝、池田直樹の四氏、ともに日本一流の方々をお迎えして開催致します。中で木村、板橋の両氏は地元熊本のご出身というのも、私達の喜びであり誇りであります。合唱は公募して編成された県民第九の会合唱団、オーケストラは熊本交響楽団です。メンバーの中には勿論専門の音楽家もありますが、大多数は素人で、会社員、主婦、学生、教師、医師等に職業を持つ人達です。合唱団の公募には、400名を超える人達が集まってその熱意に感激させられました。

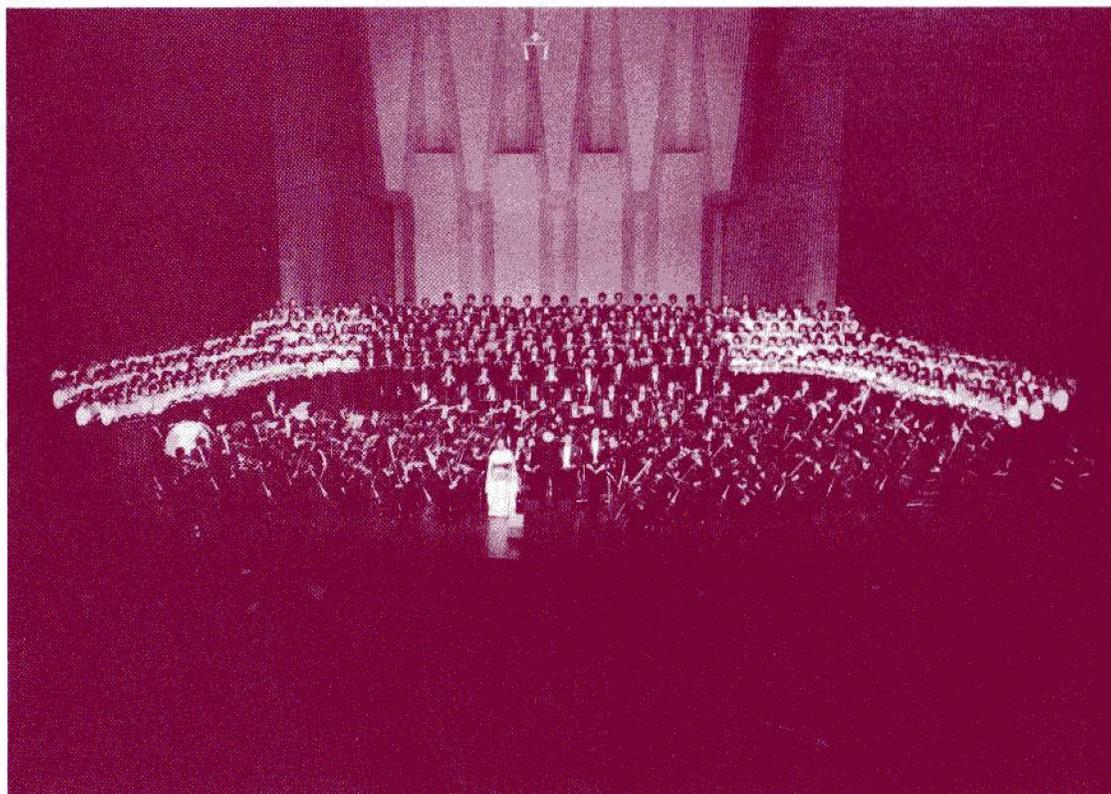
通常、素人の演奏は余興の域を出ないものですが、第九だけは別です。演奏する者の真心と熱情によって、技術を超えた感動を与えてくれます。聴く人の心に深く訴える魂の音楽にすることも可能です。私達はそういう演奏にしたいと、9月以来練習に励んで参りました。山岡氏の卓越したご指導によって、その願いにいくらか近づくことが出来たかと自負しております。未熟な点多いかと存じますがご寛容下さいまして、慌しい年の瀬の、せめてこの一刻を、音楽と共にお過ごし下さればと存じます。来る年への新しい勇気を与えてくれる歓喜の調べを、ホール一杯に響かせましょう。

出演  
PERFORMANCE

指揮 山岡重信

独唱 ソプラノ 中沢 桂  
メゾ・ソプラノ 木村宏子  
テノール 板橋 勝  
バリトン 池田直樹

合唱 県民第九の会合唱団  
(合唱指揮・林原隆治)  
管弦楽 熊本交響楽団



昭和57年12月28日〈県民第九の会演奏会（指揮＝山田一雄）〉から

指揮者のプロフィール  
CONDUCTOR; PROFILE



指揮 山岡重信

1931年東京に生まれる。1953年早稲田大学工学部卒業。ヴァイオリンをW・カルポーニ、滝川弘、作曲を小船幸次郎、指揮を岩城宏之、斉藤秀雄の各氏に師事。読売日本交響楽団などでヴァイオリン奏者としての活躍を経て、1967年から藤原歌劇団副指揮者として指揮活動に入った。同年、民音指揮者コンクールに入賞し、読売日本交響楽団からベートーヴェンの「交響曲第九番」でデビューした。

1968年読売日本交響楽団指揮者に就任、第10回MBCAJ賞を受賞した。翌年には札幌交響楽団指揮者を兼任し、日本クラウンに録音した「尺八ー1969」（広瀬量平作曲）が芸術祭優秀賞に選ばれた。1970年の東京バレエ団ヨーロッパ公演では、ソ連、フランス、ルクセンブルグ等で指揮をし、1972年には東



京都交響楽団指揮者に就任、日本ビクターに録音した「日本の管弦楽作品1914-1942」が芸術祭大賞を受賞した。1976年9月から1年間、文化庁派遣海外研修員としてドイツ、オーストリアに滞在している。

現在は、群馬交響楽団指揮者として活躍する他、大学オーケストラ、市民オーケストラの育成にも力をそそぎ、オーケストラ界はもとより最近では吹奏楽の分野にまで、広くその力を認められている。

中沢 桂(なかざわ・かつら)  
ソプラノ



東京芸術大学出身。  
1959年「ルサルカ」(ドヴォルザーク)の日本初演のルサルカでデビュー。ひき続き「リゴレット」(ヴェルディ)のジルダを好演。  
1960年、チェコの音楽祭「プラハの春」の第13回国際コンクールで第3位に入賞。  
帰国後の活躍は目覚ましく、「魔笛」(モーツァルト)の夜の女王、「ドン・ジョヴァンニ」(モーツァルト)のドンナ・アンナ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」(マスカーニ)のサントゥッツァ、「フィガロの結婚」(モーツァルト)のズザンナ、「トスカ」(プッチーニ)のトスカ、「蝶々夫人」(プッチーニ)の蝶々さん、「椿姫」(ヴェルディ)のヴィオレッタ、「修禅寺物語」(清水慎)の楓、「シンデレラ」(ロッシニ)、「ホフマン物語」(オッフェンバック)のアントニア、「夕鶴」(團伊玖磨)のつう、「真夏の夜の夢」(プリトゥン)のタイタニア、「春琴抄」(三木稔)の春琴などを歌う。  
最近の名演として1976年の「後宮よりの逃走」(モーツァルト)のコンスタンツェ、1977年の「ルチア」(ドニゼッティ)のルチア、1978年の「ファウスト」(グノー)のマルガレーテ、その後「リゴレット」のジルダ、「香妃」の香妃、「蝶々夫人」の蝶々さんなど、またコンサート・シンガーとしてもリサイタルを全国各地でひらくほか、交響楽団との協演でベートーヴェンの「交響曲第九番」や、「メサイア」などオラトリオ、宗教曲のソロを歌い、我が国ソプラノ界の第一人者としての地位を保っている。  
1976年、チェコスロヴァキア共和国よりスメタナ賞を、1977年には第5回ウイナーワールド・オペラ賞を受賞している。  
二期会会員。ビクター専属。

木村宏子(きむら・ひろこ)  
メゾ・ソプラノ



東京芸術大学卒業。関種子、佐々木成子に師事。  
1957年文化放送賞受賞。  
1959年「フィガロの結婚」のケルビーノでオペラにデビュー。美しい声と広い音域、豊かな音楽性と表現力を持ち、その後「椿姫」のフローラ、「ロング・クリスマス・ディナー」(ヒンデミット曲)のジュネヴィエーヴ、「ラインの黄金」のフロースヒルテ及びウオーフリンテ、「蝶々夫人」のススキ、「こうもり」のオルロフスキー、「ナクソス島のアリアドネ」(R. シュトラウス)の作曲家、「ファウスト」のジーベルなどを歌っている。  
他方、コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年から5年間、N響の「第九」のソリストとして連続して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演により、「レクイエム」(モーツァルト、ヴェルディ)、「メサイア」(ヘンデル)、「クリスマス・オラトリオ」(バッハ)、変ホ長調ミサ(シューベルト)他多くの曲を演奏しており、この分野に於いても不可欠の存在となっている。  
また、'74年の「毎日ソリスト」で'78年6月に行ったリサイタルでは、ドイツ歌曲の真髄に迫り絶讃をあびている。1982年「テイドとエネアス」の名演唱によりウイナーワールド・オペラ賞を受賞。  
二期会会員。

板橋 勝(いたはし・まさる)  
テノール



東京芸術大学卒業。同大学院修了。  
渡辺高之助、中山梯一、G. ヒュッシュに師事。  
オペラ「こうもり」のアルフレードでデビュー以来、「ボエーム」のロドルフォ、「カルメン」のホセ、「椿姫」のアルフレードをはじめとして、「リゴレット」のマントーヴァ公爵、「後宮よりの逃走」のベルモンテ、「魔笛」のタミーノ、「ドン・ジョヴァンニ」のオッターヴィオ、「ローエングリン」のタイトルロール等を歌って好評を得ている。その他オラトリオ等ではヘンデルの「メサイア」、バッハの「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」、「クリスマスオラトリオ」、「口短調ミサ」をはじめ、ハイドンの「四季」、モーツァルトの「レクイエム」、ベートーヴェン「第九交響曲」、「荘厳ミサ曲」、マーラー「交響曲8番」、ドボルザーク「スタバト・マーテル」、ヴェルディ「レクイエム」等多数のコンサートに出演、これらの演奏の中でもコシューラー(後宮よりの逃走)、若杉弘(ローエングリン)、小沢征爾(スタバト・マーテル)、秋山和慶(メサイア)、山田一雄(マーラー8番)、森正(ヴェルディ・レクイエム)等、極めて高いレベルの評価を受けている。  
この他、ドイツ歌曲、イタリア歌曲、日本歌曲等によるリサイタルや放送なども行っている。  
二期会会員。

池田直樹(いけだ・なおき)  
バリトン



東京芸術大学卒業。同大学院修了。  
小島琢磨、中山梯一に師事。  
1972年、芸大メサイアのソリストとしてデビュー。翌73年皇居に於ける御前演奏に出演。  
1975年、第10回民音コンクール第2位入賞。  
オペラでは、1977年「フィデリオ」のドン・フェルナンドをはじめ、「魔笛」の弁者、'78年「ファウスト」のワグナー、'79年には「ローエングリン」のハインリッヒ1世、「フィガロの結婚」のフィガロ、などの大役を次々に演じ注目されている。  
また、やわらかく深みのある声でコンサートへの進出も目覚ましく、ブルックナーやドボルザークの「テ・デウム」、ヘンデルの「メサイア」、ベートーヴェンの「交響曲第九番」等を歌っている。  
1980年10月より文化庁派遣芸術家在外研修員としてミュンヘンに留学し、1981年10月に帰国した。  
1982年1月の「ドン・ジョヴァンニ」のレボレロ、「アイーダ」のエジプト王などで進境の著るしさを示している。又、1983年「ジークフリート」のヴォータンを、1984年には新日フィルでの「ラインの黄金」(コンサート形式)でもヴォータンを見事に歌いあげ、その高い音楽性が評価された。  
二期会会員。

1. 弦楽のためのアダージョ 作品11

バーバー

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125

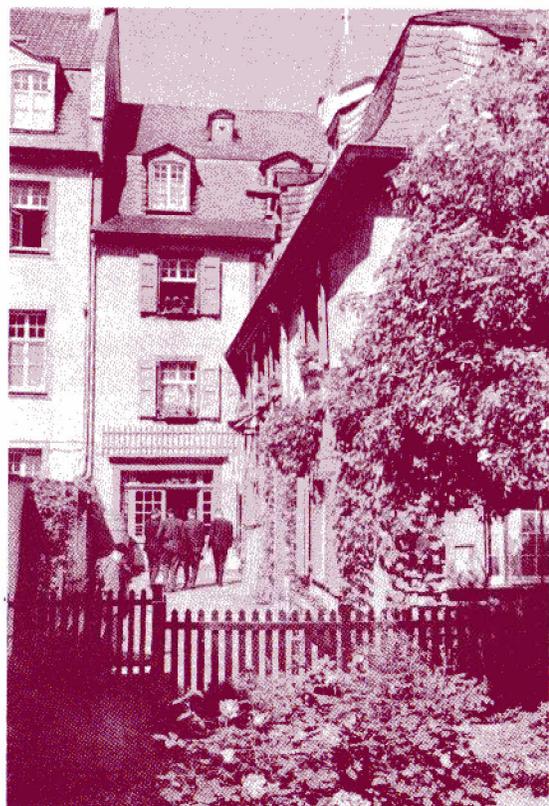
ベートーヴェン

第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco  
maestoso

第2楽章 Molto vivace

第3楽章 Adagio molto e cantabile

第4楽章 Presto



ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げると、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手に取るようにわかる。

■シラー＝《歓喜に寄す》

対訳＝大宮真琴

バリトン独唱

O Freunde, nicht diese Töne / Sondern  
lasst uns angenehmere anstimmen, und  
freudenvollere.

おお、友よ、この調ではなく、  
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを  
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

Freude, schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elysium.  
Wir betreten feuer-trunken,  
Himmlische, dein Heiligtum /  
Deine Zauber binden wieder,  
Was die Mode streng geteilt;  
Alle Menschen werden Brüder,  
Wo dein sanfter Flügel weilt.

①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！  
楽園の娘らよ！  
われらみな、感動に酔い、  
天の高みの神殿に踏み入ろう！  
②この世に厳しく引き離された者らを、  
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。  
御身の優しい翼の憩うところ、  
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

Wemder grosse Wurf gelungen,  
Eines Freundes Freund zu sein,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
Mische seinen Jubel ein /  
Ja, wer aubh nur eine Seele  
Sein nennt auf dem Erdenrund /  
Uud wer's nie gekonnt der stehle  
Weinend such aus diesem Bund /

③大いなる天の賜物をうけた者らよ、  
真空の友情をがち得た者らよ、  
女の優しい愛を得た者らよ、  
歓びの歌を、ともに歌え！  
④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも  
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！  
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、  
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

Freude trinken alle Wesen  
An den Brüsten der Natur;  
Alle Guten, alle Bösen  
Folgen ihrer Rosenspur.  
Küsse gab sie uns und Reben,  
Einen Freund, geprüft im Tod.  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
Und der Cherub steht vor Gott.

⑤すべてこの世に在るものら、  
自然の胸から歓びを飲み、  
すべての善人も、すべての悪人も、  
歓びの薔薇の小径を行く。  
⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、  
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、  
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、  
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
Durch des Himmels prächt'gen Plan,  
Laufet, Brüder, eure Bahn,  
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、  
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、  
⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、  
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合 唱

Seid umschlungen Millionen /  
Diesen Kuss der ganzen Welt /  
Brüder über'm Sternenzelt  
Muss ein lieber Vater wohnen.  
Ihr stürzt nieder, Millionen ?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt ?  
Such' ihn über'm Sternenzelt /  
Über Sternen muss er wohnen.

⑨たがいに手を取り合おう、億万の人々よ！  
この口づけを、全世界にあたえよう！  
同朋（はらから）よ、星のかなたには、  
愛する一人の御父が住み給うのだ。  
⑩ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。  
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。  
星空のかなたに、主をさがし求めよう！  
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1. 弦楽のためのアダージョ

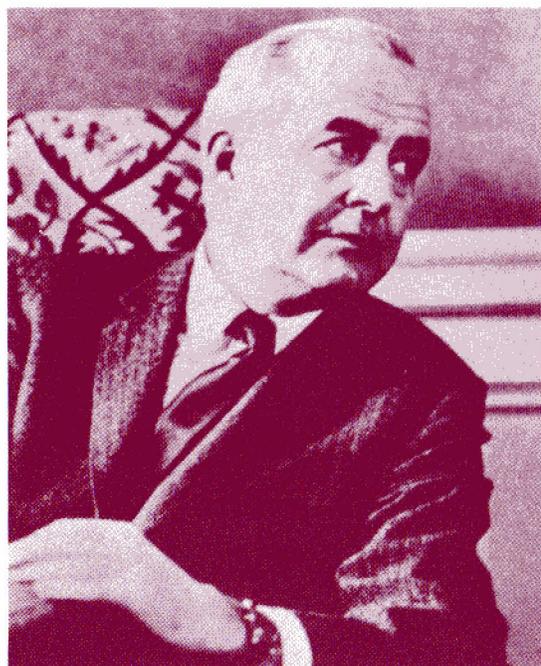
バーバー

リミュエル・バーバー(1910~)は現代アメリカを代表する中堅作曲家の一人で、その中でもっとも堅実な保守派的な存在である。作風は一体に旋律的でロマン的な情緒にあふれ、和声法は常識的で色彩感に富み、現代音楽特有の無調や多調、12音技法やジャズ的な要素は殆ど認められない。かれの作品は早くからトスカニーニやワルター、ロジンスキーなどによって取り上げられており、ヨーロッパ各地でもしばしば演奏されている。

弦楽のためのアダージョは、1937年イタリア留学中に作曲した弦楽四重奏曲第1番の第二楽章を弦楽オーケストラ用に編曲したものでアダージョで奏されるこの作品は、きよらかな抒情と情熱をたたえた逸品で、トスカニーニによって初演されて以来、世界にひろく知られるようになった。

曲は静かな和音の伴奏により第1ヴァイオリンが瞑想的な主題を提示する。この主題は次にヴィオラに現われ、自由なフガートを展開するかのように対位法的に進みながら、しだいに音力を増し、フォルティッシモの頂点が築かれる。フェルマータの休止をにおいて、再び主題が最弱音で静かに奏されて曲が終る。

静的で簡素な動きの中に無限の雅趣をもち、バーバーの特徴と真髄を端的に示した作品である。



サミュエル・バーバー

2. 交響曲第9番 二短調「合唱付き」作品125

ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボン人のフィッシャーは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいできて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルトナート劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

〔第一楽章〕 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度(第三音がない)の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃(ほうはい)として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然(しょうぜん)たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは、再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

〔第二楽章〕 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻醉へと駆りたてられるからである……」と言っている。

〔第三楽章〕 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第2主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱(ゆううつ)な感覚へと溶けちせて行くことか、思い出がごとくに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのようと思われる…」といっている。

〔第四楽章〕 Presto

第1呈示部—まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歎ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返ししながら全合奏に至る。

第2呈示部—この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く、力強く歌いくわわる。

再現部—やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組合わされて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中のひとつのクライマックスを形づくる。

コーダ—曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかざりをつくして、交互に歌いすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

(60音順)

実行委員長	有馬 俊一	実行委員	藤枝 昭俊
実行委員	沖津 正巳	〃	三浦 洋一
〃	蔵岡 隆	〃	本山 洋
〃	下田 宰城	〃	森 真一
〃	黒葛原 潔	〃	森 義臣
〃	林原 隆治	〃	山崎 崇伸



昭和60年2月～3月

〈コンサートマスター〉

鶴 和美

〈1stヴァイオリン〉

上田 忠幸

小山 雅子

清永 健介

桑原 敦子

重石 政和

柴谷 淳

鈴木 洋子

角田 整保

鶴 和美

豊島 登志子

東 真知子

長尾 治代

長坂 浩子

前田 くみ子

松山 和

森川 敬之

山崎 崇伸

吉永 誠吾

〈2ndヴァイオリン〉

秋山 敦子

池辺 敏一

伊藤 節子

大塚 操

岡 純子

草野 正夫

小柳 敦子

汐月 哲夫

田野 育美

中尾 麻美子

中野 真由美

野田 和子

原 知子

平井 隆博

広瀬 大喜

藤本 佳澄

松崎 浩二

宮本 吉辰

本山 洋

山本 佳世子

横手 とし子

〈ヴィオラ〉

荒木 拓実

牛島 啓子

太田 田美子

緒方 肇

緒方 けい

清元 晃

草野 立太郎

千々和 莊六

西 和恵

野尻 晃一

藤米田 重典

松野 多恵

丸野 真司

森田 茂武

吉田 美智子

渡辺 精一

〈チェロ〉

安達 信一

井石 哲也

石垣 博志

内田 園子

片山 令子

古泉 優子

土野 優

高浜 秀光

長尾 和治

長坂 輝喜

福永 憲包

本田 義信

佛淵 信夫

三浦 純子

水原 貞純

〈コントラバス〉

尾崎 恵

古泉 俊彦

国米 稔

坂田 拓司

坂田 英津子

津曲 肇

水谷 真理子

〈フルート・ピッコロ〉

緒方 宏明

木村 邦子

佐藤 英一

柴田 芳江

〈オーボエ〉

田尻 和也

辰野 裕昭

中村 美春

宮本 千草

〈クラリネット〉

黒木 健次

原 敏郎

高野 栄次

〈ファゴット〉

小田 穂積

黒田 孔太郎

高木 群之

田畑 博美

〈ホルン〉

上村 直久

黒葛原 潔

安松 真司

山口 亮二

吉津 晶子

吉村 善孝

林 滋之

〈トランペット〉

豊田 恭司

中野 真一郎

堀江 幸司

リチャード・セトル

〈トロンボーン〉

鍋島 靖夫

古澤 浩幸

米村 宏

田北 洋康

〈打楽器〉

大仁田 弘喜

金坂 義徳

白尾 友宏

野瀬 晶子

2月10日(日)正午開演  
第2回 熊本能

能

宝生流 班女

金春流 舟弁慶ほか

A席3,000円・B席1,000円(全席自由席)



班女

舟弁慶

3月10日(日)18時30分開演

中村絃子 ピアノ  
リサイタル

ベートーヴェン/ピアノ・ソナタ第14番「月光」

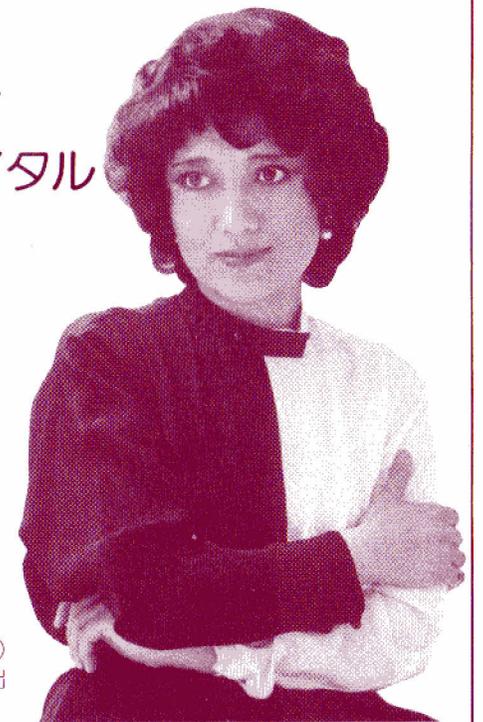
シューマン/ピアノ・ソナタ第3番ハ短調Op14

ドビュッシー/組曲「ピアノのために」

ショパン/幻想ポロネーズ

ワルツ第1番「華麗なる大ワルツ」

ポロネーズ第6番「英雄」



S席 3,000円・A席 2,500円・B席 2,000円(全席指定席)

※八代(宇土経由)・荒尾(玉名経由)からは鑑賞送迎バスが出ます。詳しくは県立劇場事業課までお問い合わせ下さい。

3月31日(日)14時開演

九州ジュニア・  
ユースオーケストラ

指揮：芥川也寸志 ～九州各県のジュニア・ユースに

曲目=未定 よる年に1度のフェスティバル～

大人 1,500円・学生(大学生以下)1,000円(全席自由席)

